

たきのうえ を思う

音更町在住
堀田 正晴さん



誰にでも母があるように誰にもふるさとがある。私はもの心がつくと滝上の駅前にあった豆腐屋の息子であった。豆腐屋は朝が早く夫婦共稼ぎである。私は昭和十五年生まれであるから、昭和十七年、八年頃であろうか近所の年上の方達と保育所に通っていたのをうつすらと憶えている。戦争の真ただ中であつたので、大きい者から順に列をなして通っていた。

週日大同窓会で神社のお参りをさせてもらった。その時の先輩方が、ここに保育所があり懐かしいと言われていたので、初めて私が通っていた場所を知ることが出来た。そう想えば幼い私が神社の階段で遊んでいる姿が見えそうであった。その後火災により私は昭和二十二年に札久留小学校へ入ることになった。その当時十校位あつたのだろうか、殆ど交流がなかった。唯一想い出すのが、中学三年の時、全町弁論大会に出て「貧しき友よ希望を持って」と言つて怒鳴つたのが懐かしい。今浪曲をやっているが、何か通じる所がありそうである。高校は紋別へ通わせて貰つた。朝六時頃自転車で滝上の駅まで行き、煙を上げる汽車で約二時かかり紋別駅に着く。それから三十分位歩いてギリギリに学校に着く。帰りはその逆であるが、若いという事は凄いものである、あまり疲れたと思わなかつた。ただ勉強も部活もする暇はなかつた。

昭和三十四年に高校を卒業後、木工所の社長宅に住み込み帳場として働いた。当時滝上は風倒木景気が落ち始めていたが、人口一万を越し町議の過半数を木材屋が占めていた、工場も十件位あつた。若い私はこれから滝上が衰退することを予測出来なかつた。だから一生滝上で生活できるものだと思つていた。何の不満も無かつたが、新しい世界にあこがれが湧いてきて、お巡りさんになると言つて親と古里を離れた。親も古里を離れさせた。

両親は共に異郷の地で旅立つた。特に父のメモの中には「滝上に帰りたい。」と書かれていた。やっぱり滝上が良かったのだと知りました。両親のお骨は滝上のお寺に収め、私が七十五歳に成るまで毎年滝上に通つた。古里は親と一緒にあり、一日も忘れる事が出来ないものである。

天気予報を見ていると、滝上に豪雪や猛暑があると事故が無いよう

にと祈っている。滝上の衰退を悲しみ、七面鳥やチーズを売り出している元気な滝上を見ると嬉しくなる。残っている人も大変でしょうが、いつまでもいつまでも元気な滝上を守っていて欲しい。そして私たちが喜びを知らせたい時や、悲しみを訴えたい時も滝上を守っている皆さんがやさしく迎えてくれるのがいちばん嬉しいのです。私も今滝上公園にあるお墓に眠りたいと思ひ土地を求めましたが、お墓を守ることができない事になり、涙を飲んで親戚に譲りました。今はゴルフや川柳等趣味を楽しんでいます。でも心はひと時も滝上を忘れる事は無い。いつでも心は滝上に帰る事ができる私です。

